



がん哲学外来市民学会第7回大会 会長

竹川 茂

(富山県立中央病院 緩和ケアセンター 部長)

この度、「がん哲学外来市民学会 第7回大会」を富山で開催することになりました。北陸では福井、金沢に次いで3回目の開催となりますが、私の故郷金沢のお隣の富山で大会長を務めさせていただくことは、身に余る光栄と存じております。お集まりの皆さまをはじめ関係各位のご尽力に対して、厚く御礼申し上げます。

本大会は、「明日の光りをみつけて」をメインテーマに企画・構成致しました。現在、私は外科医を卒業(?)して緩和ケア医に専念しております。がん患者さんに向き合うという点では外科医も緩和ケア医も変わらないのですが、がんの再発後や抗がん治療の中止後では、緩和ケア医の関わり方が患者さんのQOL(生活の質)に大きく影響するようになって感じています。目標を持っておられる患者さんに、その目標を話してもらうことでご自身も再認識し理解を深め、そこに向かって進もうとする、進みたいと思う意思が続くことが、生きる糧となり命を支える力になり、QOL(生活の質)が向上するのではないかと感じます。

がん哲学外来では樋野先生と面談することで元気に、笑顔になる患者さん、家族が居ます。樋野先生の言葉一つで背筋が伸び、もう一度頑張ってみようと思ひ、面談からの帰りの足が軽くなることで身体も心も楽になる。それががん哲学外来と通常のカウンセリングとの違いではないでしょうか。

目標が「明日の光り」、樋野先生の言葉が「羅針盤」でしょうか。みなさんそれぞれが、がんという病気と対峙して大切なものを見失いそうになる状況の中で、樋野先生の言葉で「明日の光りを見つけて」前を向く。そんな場面が全国各地のメディカルカフェで増えていくことを期待しています。

今大会では、参加された皆様が樋野先生に次いで「羅針盤」になれるよう、がん患者さんの個々の「明日の光り」について共に理解し、患者さん、ご家族に気づきを促せるきっかけになればと思っています。

3年前の春に北陸新幹線が金沢まで伸びて、富山も東京にとっても近くなりました。北陸の文化、北陸の食材がよりいっそう各地に拡がるとともに、全国の文化が北陸にも流れてくるでしょう。文化の交流が「独りにしない」人の輪を広げることにつながればと思います。

今年の冬は何年か振りに大雪に見舞われました。高速道路は遮断されて交通は麻痺し孤立した町も生まれて、地元の者でも雪を恨めしく思いました。食材は夏よりも冬の方が美味しいものが多いのですが、やはり冬将軍の時期には静かに過ごすのが一番です。この夏は海も山もすぐ近くにある北陸の自然を堪能していただければ幸いです。